

原田走一郎 (長崎大学) haradaso@nagasaki-u.ac.jp

## 1. はじめに

本発表ではまずいわゆる「排他の「が」」について考える。「排他の「が」」について野田 (1996: 240) では「排他の「が」がつきにくいのは、対象を表す「～を」や、結果の状態を表す「～に(なる)」などである。こうした格成分は、主格的な性質をもてないので、「～が」になることはほとんどない。」と述べられている。本発表では、話しことばにおいては対象であっても「排他の「が」」をとることがあることを述べる。たとえば、次の例である。

- (1) 「ビール飲む？」に対して) ビールのほうがよく飲みます  
(小磯ほか 2023 国立国語研究所日本語日常会話コーパス T006\_004/95740)

しかし、同じ対象であっても「排他の「が」」の容認度は例によって異なるようである。次の 2 例では、容認度に差が出る。(2) のほうを容認する人数が多い。

- (2) Aさんはビールよりワインのほうが飲むよ。  
(3) Bさんはビールは一滴も飲まないけど、ワインのほうが飲むよ。

このようなことから、対象が「排他の「が」」をとりやすいのは、“比較”を表す場合だと考えられる。本発表では、この比較という概念が前述の現象以外の説明に際しても有用であることを示す。なお、本発表においては Stassen (2013) による「In semantic or cognitive terms, comparison can be defined as a mental act by which two objects are assigned a position on a predicative scale.」という記述を参考にし、比較を「段階性のある尺度に複数の点を位置づけて、それらの位置を比べること」とする。先行研究を引用する場合はこの限りではない。

本発表の構成は以下のとおりである。2 節で「排他の「が」」に関する先行研究を本発表に関する範囲で簡単にまとめる。3 節ではアンケート調査の結果を述べ、続く 4 節で「が」が比較の場合に許容されやすい理由について考える。5 節では諸方言の分析において比較という概念が有用であることを示す。6 節では今後の課題について述べる。

## 2. 先行研究

「排他の「が」」に関する先行研究は多い。久野 (1973) においては「総記の「ガ」」と称される。本発表では「排他の「が」」と称する。野田 (1996: 238) においては「(ア) 2 つ以上の候補を比較して選択する文になっている (イ) 「が」がつく成分が、主格的な性質をもっている」という 2 つの条件をみたす場合に排他専用の「が」が使われるとされている。

(イ) の条件を備えていない場合として、次の例が挙げられている。

- (4) \*私はお酒ではなくジュースが飲んだ。(野田 1996: 244 (23))

つまり野田 (1996) では、(4) の例は「2 つ以上の候補を比較して選択する文になっている」と判断されているものと思われる。これは、本発表における比較とは一致しないのであるが、この点については次節で述べる。

### 3. アンケート調査の概要とその結果

本発表ではアンケートによって得られた資料を用いる。2024 年 6-7 月に関東、中部、近畿、九州に所在する大学の学生に対してオンラインアンケート<sup>1</sup>を行った。日本語の例を示し、自分自身のことばとして「a. 言える」「b. 違和感はあるが、どちらかと言え」と「c. 言えない」の 3 択により回答を得た。有効回答数は 226。調査で用いた例文の一部とアンケートの結果を次の表に示す。上段の数字は実数、下段は割合である。

表 アンケート結果（下線はアンケート時に示したとおり）

|   | a              | b             | c              |
|---|----------------|---------------|----------------|
| あ) A さんはビールよりワインの <u>ほうが</u> 飲むよ                                  | 152<br>(67.3%) | 61<br>(27%)   | 13<br>(5.8%)   |
| い) A さんはビールよりワインが飲むよ  | 1<br>(0.4%)    | 20<br>(8.8%)  | 205<br>(90.7%) |
| う) B さんはビールは一滴も飲まないけど、ワインの <u>ほうが</u> 飲むよ                         | 51<br>(22.5%)  | 74<br>(32.7%) | 101<br>(44.7%) |
| え) B さんはビールは一滴も飲まないけど、ワインが飲むよ                                     | 0              | 10<br>(4.4%)  | 216<br>(95.6%) |
| お) (いつもはワインを飲むけど) 昨日は、C さんはワインより <u>ビール</u> の <u>ほうが</u> 飲んだよ     | 77<br>(34.1%)  | 93<br>(41.2%) | 56<br>(24.8%)  |
| か) (いつもはワインを飲むけど) 昨日は、C さんはワインより <u>ビール</u> が飲んだよ                 | 0              | 10<br>(4.4%)  | 216<br>(95.6%) |
| き) (いつもはワインを飲むけど) さっきは、D さんはワインじゃなくて <u>ビール</u> の <u>ほうが</u> 飲んだよ | 39<br>(17.3%)  | 68<br>(30.1%) | 119<br>(52.7%) |
| く) (いつもはワインを飲むけど) さっきは、D さんはワインじゃなくて <u>ビール</u> が飲んだよ             | 0              | 4<br>(1.8%)   | 222<br>(98.2%) |

アンケートの結果、「A さんはビールよりワインのほうが飲むよ。(2)、あ)」は 67%ほどが「言える」と回答した。「違和感はあるが、どちらかと言え」まで含めると 94%であり、これを日本語として不適格と認めるのは困難と思われる。この結果と、野田 (1996: 240) の「排他の「が」がつきにくいのは、対象を表す「～を」や、結果の状態を表す「～に(なる)」などである。」という記述とは矛盾するように思われる。では、これに対してどのような説明が可能であろうか<sup>2</sup>。本発表では、「のほうが」という表現が使用されているこ

<sup>1</sup> 非母語話者による回答と欠損のある回答を除いた。

<sup>2</sup> 世代差も考えられるが、現段階では十分な資料がない。(1) の日本語日常会話コーパスの例は収録当時 (2016-19 年) 20-24 歳の神奈川県出身の女性によるものとのことである。なお、発表者が個人的に尋ねた範囲では、発表者と同年代の中年層の話者は「A さんはビールよりワインのほうが飲むよ」を「言える」と判断することが多いようである。

と恒常的な状態（野田 1996: 232）を表す文であることに加えて、この文が（本発表が述べるところの）比較を意味する文であることも野田（1996）の例外が生じた要因であると考えられる<sup>3</sup>。これは、比較という点で対立する「あ vs. う」、「お vs. き」などのペアの対比から言える。実は、先述の「のほうが」、「恒常的な状態」、「比較」という3点が野田（1996: 244）の例（(4)「私はお酒ではなくジュースが飲んだ。」）と（2）の例（「Aさんはビールよりワインのほうが飲むよ。」（あ））との違いである。本発表では比較という概念に注目しているので、ここで、比較という点においてこれらの例の違いを考える。（4）の例においては、「お酒」が飲まれたことは否定されているが、「ジュース」は飲まれている。そのため尺度上にある点は1つである。いっぽう、（2）の例の場合、「ビール」も「ワイン」も飲まれているため、同じ尺度上にそれぞれ点を占めていると言える。上述のペアの対比から、この意味上の差がこれらの容認度の違いの一因となっているものと考えられる。なお、ここで述べたような、一つの尺度上の複数の点の位置を比べる場合と、そうでない場合を峻別すべきであるという考えは他言語に基づいた研究においても見られる（Zeisler 2018）。

#### 4. なぜ比較の場合に許容されやすいか

本節では、「が」が比較の場合に許容されやすい理由を考える。本発表では、「が」が非主題を標示する（野田 1996: 10-11、下地 2019）のが根本的な理由であると考えられる。ここでは、「が」が比較の解釈を受ける典型である形容詞文について考える。典型的な形容詞文の唯一項が「が」で標示された場合、（かつ、「が」が非主題を表すと考えると、）文全体が焦点になる文焦点の場合と、項だけが焦点になる項焦点の場合とが想定される。文焦点の例は「空が青い」のようなものである。項焦点の場合、2つの場合が想定される。1つ目は、A「どこが暑い？」B「佐賀が暑いよ」のような文脈の場合であり、この場合、意味上の尺度は先行文脈に存在するが、尺度上に点はない。いっぽう、A「九州では福岡が暑いよね」B「佐賀が暑いよ」のような場合、意味上の尺度のみならず尺度上の点も先行文脈に存在する。この場合に比較の解釈が生じるものと考えられる。なぜなら、尺度と点がすでに文脈上にあるため、結果的に複数の点が尺度上に置かれることになる（ことが多い）ためである。

このように「が」そのものにも比較の解釈を受ける素地があったものと思われるが、「のほう」が用いられることによって、比較であることが明示されるものと考えられる。これは、「ほ

---

<sup>3</sup> “比較”と“恒常的な状態”のどちらが優勢か、もしくはそれらの関係はどうかという点については興味を持っているが、本調査からは両者の関係は判断できなかった。まず、「のほう」を用いた場合に“比較”がより効いているという結果が出るのは当然のように思われるので、この場合は議論から除かなければならない。そこで、「が」のみの場合について“比較”に反応している人が多いか、“恒常的な状態”に反応している人が多いか比べてみた。しかし、そもそも「が」のみのいずれかの例文について「a. 言える」「b. 違和感はあるが、どちらかというと言える」のどちらかを回答した人が24名しかいなかった。このうち、“比較”と“恒常的な状態”の片方だけに反応している人は6名で、3名ずつがそれぞれに反応していた。そのため、今回の調査結果からはなんとも言えない、という状況である。ただ、すくなくとも“比較”だけに反応している人もいるということは言える。

う」が方向を意味するためである。1つの方向は必然的に他の方向の存在を含意するため、「のほう」がついたものとは別のものの存在が含意される。したがって、意味的な尺度上の点について考えた場合、「のほう」は別の点の存在を含意することになる。これが比較専用の標示として再解釈された結果、格関係や意味役割に関わりなく比較であれば使用可能な表現として使用している人もいるという状況なのではないかと、本発表では本調査の結果を解釈する<sup>4</sup>。

なお、南琉球宮古語諸方言において、属性的な概念を意味する語根から派生されたある種の形容詞や動詞が項焦点の場合に用いられ、比較の意味にも解釈されることが知られている (Koloskova and Ohori 2008、陶 2022)<sup>5</sup>。

## 5. 比較という概念が分析に有用なケース

本節では、これまで述べてきた比較という概念が他の日本語諸方言の現象の分析にも有用であることを述べる。福岡県柳川市方言の=ga、長崎県葦路木島(やぶろきしま)方言の「が」と「の」、和歌山方言の「しか」、西日本方言の「のが」の4つを取り上げる。

### 5.1. 福岡県柳川市方言の=ga

福岡県柳川市方言の焦点助詞=gaは比較の際に用いられる(松岡 2024: 190, 386-8)<sup>6</sup>。例の下線は発表者が追加した。

- (5) taroozja naka. {zirooni/ \*zirooniga} kuraserareta.

「太郎じゃなくて次郎に殴られた。」

- (6) taroonimo ziroonimo kuraseraretabatten {zirooni/ zirooniga} yoo kuraserareta.

「太郎にも次郎にも殴られたけど、次郎の方によく殴られた。」

このように比較の場合には焦点助詞=gaが使用される。したがって、柳川市方言の記述の際には比較という概念が必要である。

---

<sup>4</sup> どのような述語が尺度を持つかという点も関係があるように思うが、この点については今後の課題としたい。

<sup>5</sup> Jacques (2016) では「in comparative constructions, the comparee is more often the focus than the standard.」と述べられている。compareeなどの要素については後述する。また、ニジェール・コンゴ語族の Jamsay では、比較の意味を持つ形容詞述語文、もしくは項焦点の形容詞述語文の場合、述部(すなわち形容詞)が脱焦点の音調(L-tone)で実現し、さらに、比較や焦点でない場合には現れる疑似動詞とそれに後接する主語標示の代名詞接尾辞が生じず、独立した代名詞として主語が形容詞より前に現れなければならない(Heath 2008: 432-3, 445)。ただし、このケースは、比較の意味を持たなくてもこのような特徴が生じるようである(Heath 2008: 433)。したがって、宮古語と同様に形容詞述語文主語の焦点化と比較解釈の親和性を示す例ではあるが、比較のみによって当該の特徴が現れるわけではない点において、5節で扱う日本語諸方言の形式とは異なる。

<sup>6</sup> 格助詞に「が」が続く例は標準口語、古典語、他方言にも見られる(Nakagawa 2020: 130、山田 2015、原田 2024)。なお、韓国語にも似た連続が見られる(小島ほか 2021)。

## 5.2. 藪路木島方言の「が」と「の」

原田 (2024) によると、長崎県の藪路木島方言においては、動詞述語かつ無生物主語かつ対比焦点の場合、主語の標示には「が」と「の」(もしくは「ん」。「ん」と「の」は異形態。)のどちらもが用いられる (7)。しかし、比較の場合に用いられるのは「が」だけである (8)。

- (7) 寺ん焼けたっちえなか、学校 (がっこ) {が/ん} 焼けたつ。  
「寺が燃えたんじゃない。学校が燃えたんだ。」
- (8) 寺よれ学校 {が/\*ん} 焼けたっちゅよ。 「寺より学校が燃えたらしい。」

さらに、対象は「ば」という助詞をとるが、対象が比較される場合「ば」と「が」の両方が使用可能になる<sup>7</sup>。

- (9) アキラはビールじえの一しち、酒 {\*/が/ば} 飲むをる。  
「アキラはビールじゃなくて、酒を飲んでいる。」
- (10) アキラはビールよれ酒 {が/ば} よ一飲む。  
「アキラはビールより酒をよく飲む。」

## 5.3. 和歌山方言の「しか」

和歌山方言<sup>8</sup>における「しか」という助詞は次のように用いられる。(11-15) は 1967 年和歌山市出身の話者に対する面接調査の結果である。

- (11) アキラよりタカシしかかしこい。 「アキラよりタカシのほうがかしこい。」
- (12) 日本酒よりビールしか飲むな一。 「日本酒よりビールの方を (たくさん) 飲む。」
- (13) 昨日より今日しか雨降ってるやん。  
「昨日より今日のほうが雨が降っているじゃないか。」

いっぽう、比較の意味でない場合この「しか」は不適格と判断される。

- (14) (クラスのなかで) \*タカシしか一番かしこい。  
「(クラスのなかで) タカシが一番かしこい。」
- (15) (A さんは日本酒はまったく飲まないが) \*ビールしか飲む。 「ビールを飲む。」

このように和歌山方言の「しか」も比較という概念を用いて説明する必要がある。

## 5.4. 西日本方言の「のが」

西日本方言における「のが」は次のように比較する際に用いられる<sup>9</sup>。発表者 (1982 年福

<sup>7</sup> 柳川市方言においても話者によっては対象に=ga を用いる (松岡 2024: 387)。

<sup>8</sup> 和歌山県のどの地域で使用されているか、また、和歌山県の近隣でも使用されているかなどは分からない。今後の課題である。

<sup>9</sup> 本発表では「のが」は 1 形態素と考える。つまり、比較を表す助詞ととらえる。

岡市出身)の内省に基づく<sup>10</sup>。

- (16) 福岡より佐賀のが暑い。  
(17) Aさんはビールより日本酒のが飲む。  
(18) (Aさんは日本酒以外飲まない) \*Aさんは日本酒のが飲む。

この「のが」は比較の場合にのみ使用可能である。つまり、「佐賀のが暑い」とだけ言った場合、比較の基準の存在が含意される(「え?どこと比べて?」という反応が起こる)。この「のが」は「のほうが」と同義であるように思われるが、完全に一致するわけではない。そのため、「のが」と「のほうが」を同一視することはできない。次のような違いがある。

- (19) (勤務先の飲み屋によく飲む男女が来店。「どっちがよく飲んだ?」と尋ねられて)  
男 {のほうが / のが} 飲んだよ。  
(20) (1つしかない菓を男女が奪い合っていた。「どっちが飲んだ?」と尋ねられて)  
男 {のほうが / \*のが} 飲んだよ。

(20)のように、「のほうが」は必ずしも比較の意味で用いられるわけではない。しかし、その文脈においては「のが」は不適格である。「のが」はもっぱら比較を表すことに特化した表現と言えそうである<sup>11</sup>。このように、比較という概念は諸方言の分析に有用である。

## 6. まとめと今後の課題

本発表では「が」の特異なふるまいを説明するために比較という概念が有用であること、また、この概念が諸方言の現象の説明においても有用であることを示してきた。今後の課題はいくつもあるが、まず言語類型論的な位置づけについて考え(6.1.)、その後その他の課題について述べる。

### 6.1. 言語類型論的な位置づけ

類型論的位置づけは課題である。まず前提となる Dixon (2012) の枠組みを紹介する。Dixon (2012: 343-4) は comparative scheme の典型的な構成要素として次の5つを挙げている。

- (21) John is more handsome than Felix. (Dixon 2012: 344)  
COMPAREE INDEX PARAMETER MARK STANDARD

---

<sup>10</sup> 本節の判断は1970年生の神戸市方言話者、1983年生の福岡市方言話者とも一致している。なお、西日本方言話者でもこの「のが」を使用しない話者も多数いるし、東日本方言話者がこの「のが」を使用していることを聞いたこともある。話者層未詳である。

<sup>11</sup> 標準語の「のほうが」、柳川市方言や敷路木島方言の「が」は比較でない場合も用いることができるようであるため、必ずしも比較に特化しているとは言えない。また、和歌山方言の「しか」は述部に否定の意味が含まれる場合、標準語と同様の“限定”の解釈になる。いずれの場合もどこまでを同一の形態素として認めるかという点には議論がありそうであるが、一旦同一形態素と考えた場合、比較専用とは言い難い。

本発表で扱ってきた比較の標示をこの Dixon (2012) の枠組みでとらえてみると、COMPAREE についていることがわかる。

|      |          |      |          |                  |           |
|------|----------|------|----------|------------------|-----------|
| (22) | 福岡       | より   | 佐賀       | <u>{のが etc.}</u> | 暑い。       |
|      | STANDARD | MARK | COMPAREE |                  | PARAMETER |

以下、2点述べる。1点目は COMPAREE に比較の標示を行うということの位置づけ。2点目は比較を表す文の主語につきうる標示が他の統語的要素につきうることについてである。

1点目の COMPAREE に比較の標示を行うことについて述べる。COMPAREE への標示で比較を表すのは通言語的に珍しいようである(八亀 2015)。しかし、例はあるようで、たとえば、Jacques (2016)によると Japhug (シナ・チベット語族)における *ku* という能格の接語(Jacques 2021: 303-4によると後置詞)は多くの機能を持つが、そのうちのひとつが COMPAREE を標示することのようである。*ku* は能格の標示なので通常他動詞主語につくのであるが、比較の場合、自動詞主語につき、COMPAREE を標示する(Jacques 2021: 310)。また、Donohue (1999: 360)によると *Tukang Besi* (オーストロネシア語族)では比較でない場合には主格をとる名詞句(23)が比較の COMPAREE の場合に斜格(24)をとる。(R は Realis の意。)

|      |                  |           |            |      |                  |           |            |
|------|------------------|-----------|------------|------|------------------|-----------|------------|
| (23) | <i>No-motika</i> | <i>na</i> | <i>ia.</i> | (24) | <i>No-motika</i> | <i>di</i> | <i>ia.</i> |
|      | 3R-old           | NOM       | 3SG        |      | 3R-old           | OBL       | 3SG        |
|      | ‘She’s old’      |           |            |      | ‘She’s older’    |           |            |

このように、比較表現の COMPAREE に標示を行う言語の報告はあるものの、わずかのようである<sup>12</sup>。いっぽうで、シナ・チベット、オーストロネシア、日琉と、異なる語族において報告があることから、他の言語においても類例が見つかる可能性はあるように思われる。

続いて、比較を表す文の主語につきうる標示が他の統語的要素につきうる点について述べる。本発表で述べてきた形式は「A さんのが B さんより飲む」のように主語につくことも可能であるが、同時に、「A さんはビールのが飲む」のように、主語以外にもつくことが可能であることを指摘してきた。しかし、Dixon (2012: 344)には「It seems that the Comparee is almost always some kind of subject -- (中略) -- and is marked as such.」とあり、主語以外の COMPAREE はあまり想定されていないようである<sup>13</sup>。

比較の類型論ではこれまで、Dixon (2012) の枠組みで言うところの STANDARD と MARK の標示が主に議論されてきた(Stassen 1985: 28, Dixon 2012, 風間 2018)。しかし、本発表で示したとおり COMPAREE への比較の標示も見られることから、この点に注目した研究が今後行

<sup>12</sup> 『東京外国語大学語学研究所論集』23号「否定、形容詞と連体修飾複文」特集に収録されている24言語のなかにも COMPAREE に特別の標示を行う言語は見当たらなかった。ただし、この特集も含めて、提示される例文の問題や、類型論的研究が扱う“その言語で優先的に使用される”形式の選定の問題のために COMPAREE が主題標示、主語標示されるケースがこれまでに多く取り上げられてきたのではないかと思われる。

<sup>13</sup> まったく想定されていないわけではない。*John speaks French better than Felix (speaks French)* という場合の COMPAREE は *John speaks French* とされている(Dixon 2012: 366)。

われてもいいはずである<sup>14</sup>。

## 6.2 その他の今後の課題

上述のもの以外にも課題は山積している。たとえば、「どのような述語（もしくは節）が尺度を持つか」という点は大きな課題である。本来はこの点を整理しておかないと、本研究の範囲が定まらないはずである。意味の記述の厳密性も欠けている。また、「が」の研究のなかでの本研究の位置づけも不明確なままである。「が」は統語上かつ情報構造上の標示と捉えることが提案されてきた（下地 2019: 11）が、さらに広い視点から捉えることが求められるように思われる。

参考文献 風間伸次郎（2018）「まえがき」『東京外国語大学語学研究所論集』23, 17-37./久野暉（1973）『日本文法研究』大修館書店/小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2023）『日本語日常会話コーパス』設計と特徴『国立国語研究所論集』24, 153-168./小島大輝・斎藤信浩・大和祐子（2021）「韓国語の助詞の結合形態「에가」に対する許容度の検証」『朝鮮学報』257, 77-97./下地理則（2019）「現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格標示と分裂自動詞性』1-36./陶天龍（2022）「宮古語久松方言における形容詞の動詞化接辞-kar-焦点助詞との共起と総記用法に注目して」『言語・地域文化研究』28, 197-213./野田尚史（1996）『「は」と「が」』くろしお出版/原田走一郎（2024）「長崎県葦路木島方言における「が」と「の」—無生物主語の場合—」『方言の研究』10, 29-51./松岡葵（2024）『福岡県柳川市方言の記述研究』九州大学博士論文/八亀裕美（2015）「現代日本語における「比較」へのアプローチ」『甲南大紀要文学編』164, 13-22./山田昌裕（2015）「副助詞「ガ」の存在—「カラガ」「テカラガ」を中心に—」『恵泉女学園大学紀要』27, 107-125./Dixon, R. M. W.（2012）*Basic Linguistic Theory volume 3*. Oxford University Press./Donohue, Mark（1999）*A Grammar of Tukang Besi*. Mouton de Gruyter./Heath, Jeffery（2008）*A Grammar of Jamsay*. Mouton de Gruyter./Jacques, Guillaume（2016）From ergative to comparee marker Multiple reanalyses and polyfunctionality. *Diachronica* 33（1）, 1-30./Jacques, Guillaume（2021）*A grammar of Japhug*. Language Science Press./Koloskova, Yulia and Toshio Ohori（2008）Pragmatic factors in the development of a switch-adjective language. A case study of the Miyako-Hirara dialect of Ryukyuan. *Studies in Language* 32（3）, 610-636./Nakagawa, Natsuko（2020）*Information structure in spoken Japanese*. Language Science Press./Stassen, Leon（1985）*Comparison and Universal Grammar*. Blackwell./Stassen, Leon（2013）Comparative Constructions. In Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin（eds.）*WALS Online*（v2020.3）[Data set]. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.7385533>（Available online at <http://wals.info/chapter/121>, Accessed on 2024-05-25.）/Zeisler, Bettina（2018）Contrast instead of comparison: Evidence from West Tibetan differentiating property ascriptions. *Linguistic Discovery* 16（1）, 184-217.

謝辞 古川初義、野田智子、堀江直美、松丸真大、白岩広行、平塚雄亮、松岡葵、宮岡大の各氏に調査等でお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。本研究は科研費 24K03928、24K03926、22H00007、22K00583、19H01255、19H01262 の結果である。

---

<sup>14</sup> 風間（2018）には「エウエン語およびナーナイ語の形式は必須のものではなく、本来指大辞や選別形「～の方」、「やや～だ」のような意味を示す」とあり、「～の方」を意味する要素がなんらかの比較の標示の由来になっているようである。